Combined Fleet Girls COLLECTION FAN BOOK

おしっこれくしょん 空母編 下

Piss-Colle Aircraft Carriers Latter Part

Volume 16 for ADULT ONLY

ある夜の軽巡寮集会室

この季節になると、瑞鶴、よく私たちと一緒にいるよね。
か……川内に思いもよらないことを指摘され、「ふぇ？」と間抜けな声を上げてしまった。
「そうなの？　去年は確かに、よく瑞鶴先輩についてこっちのほうへ来たけど」
「あっコラ、それ江風ンだってば！　返せ、ぱかつらぎ！」
お茶菓子を頬張りながら葛城が首をかしげ、横でちっこい駆逐の子がぎゃいぎゃい騒いでる。
「私の覚えてる限り、ここ3年間そうだよ。梅雨限定で夜戦したくなるのかなって」
「ンなわけないでしょ」
ツッコミを入れつつ、あたしは、見えないからいいやと誤魔化していたシャツの裏地の汚れを見つけられたような気持ちだった。川内も、本当のところはきっとわかってるんだろう。
「瑞鶴先輩？」
「……梅雨のころは、あんまり、空母寮にいたくない」
「先輩たちが沈んだ季節だから、ですか」
まっすぐに見つめ、まっすぐな言葉をまっすぐ突き刺してくる後輩に、あたしは唇を噛む。
巡りあわせの運、だろうか。帝国海軍の正規空母にとって、六月は鬼門だった。
緒戦で無類の強さを誇った南雲機動部隊のうち、四隻が散った。残されたあたしと翔鶴姉や軽空母たちで、日増しに不利になる戦局を必死に支え、そして二年後、翔鶴姉と最新鋭の大鳳が沈んだ。主力空母の半数以上が、この季節に最期を迎え、そのすべてをあたしは見送った。
「みんなそれぞれに、自分の過去に誇りをもってると……思ってる。あたしだって、作戦内容はともかく、義務を果たしたことに悔いはない、つもり。……でも、やっぱり、翔鶴姉も大鳳も加賀さんも、梅雨のころは、みんな浮かない顔してるのがつらい。赤城さんのお茶碗の盛りつけがあたしと同じくらいになってるし、飛龍さんのぴょこん、がへなっ、になっちゃうし、蒼龍さんのトリートメントこっそりあたしのと取り替えても気づかないし」
「瑞鶴は、みんなのことが大好きなんだね」
不意に、優しげに微笑む川内。頬が熱くなるのを自覚する。時々ずるいのよ、バカのくせに。
「……ごめんね。葛城たちに嫌な思いさせてないかなって」
「そんなことないです」
真剣な声。
「あたしたち姉妹も、最後の一航戦の主力空母。後輩であり、仲間です。遠慮なんかしないでください。あのとき間に合わなかったとしても、いま、一緒に泣いて、一緒に笑いたいんです」
「……ありがとう」
身を寄せる葛城の肩に頭を預けた。そんなにしょいこまなくても大丈夫だよ、と川内が笑う。
「あっ、でもアレじゃねーの？　今ぐらいに沈んだ空母さんたちってエロいことすンでしょ？瑞鶴さン、それが恥ずかしくて空母寮にいたくないのかと思った」
「ぶっ！」
穏やかな空気を、江風があっけらかんとブッ飛ばした。
「あ、あなた何処でそれ」
「いやーまぁ、それとなく聞きつけたとゆーか、類推？　ってゆーか」
「わ、私じゃないよ!?」
いくぶん赤面して手を振る川内。……どんなに芯の強い艦娘でも、この夜戦バカでさえも、戦没日前後には大なり小なり情緒不安定になる。枕を並べて討ち死にした艦の多い第１空母寮は、色々な相乗効果で、ちょっとその、オトナな雰囲気になる。魂を再定着させるだとか、そういう儀式的な意味合いも見出せるって提督さんは言うけれど……あたしはともかく（文句ある？）葛城にはまだ早いと思って、去年はわりと意図的に連れ出していたのだった。
「あ、あー……あの、大丈夫です瑞鶴先輩」
耳まで赤くなった葛城が、やけにはっきりと主張する。
「葛城も、えっちな漫画読んだり、ひとりでしたりはしますし、どうぞ、お気遣いなく。実はその、鳳翔さんに“診て”もらう約束が」
「えええええぇ!?」
「せ……先輩にも、“診て”もらえたら、ちょっと嬉しい、です」
「お、あ、は、はい……あたしでよければ」
「め、目の前でそんな約束されたの初めて」
こういうところは妙に健全な川内が居心地悪そう。あたしは何故かやたら謝りながら、葛城を引っ張って軽巡寮を飛び出した。
……その後数日間、第１空母寮で行われたアレコレは、公然の秘密。うぅ、恥ずかしい。

雲龍型三番艦 葛城

下着姿

「綺麗です。葛城さん」正規空母にしては細く、しなやかな体躯を晒す〝最後の空母〟に、私〝最初の空母〟は微笑みかけました。「あ、ありがとう……ございます鳳翔さん。えと、どうでしょう、瑞鶴先輩」「え……う、うん、可愛い下着ね」「出撃するときはもっと小さいのなんですけど、恥ずかしくて……」「そ、そなんだ」そわそわと落ち着かない瑞鶴さん。再改装も受けた翔鶴型はすっかり主力空母娘ですが、瑞鶴さん、こういうところはいつまで経っても末っ子気質。そこが可愛いんですけどね。

胸部装甲

「いくら駆逐艦の機関を載せてたからって、もう少しあってもいいのに」鳳翔さんの手のひらに収まってしまいそうな、ささやかな胸をさらけ出し、葛城がぼやく。「だいたい駆逐の子だってスゴい子いるのに」「そ、そうね」あたしは目を逸らすしかない。帝国海軍最大の十六万馬力を誇る機関を搭載した翔鶴型三番艦、何の因果か可愛い後輩とほとんど大差ない甲板胸です……。

陰部

葛城さんの下の毛、まだ十分に生え揃っていなくて、おさねの皮がのぞく割れ目がよく見えます。「あ、あの鳳翔さん」上ずった声で瑞鶴さん。「上は着込んで下は裸にする意味はあるんですか」「このほうがえっちです」私は言い切りました。……元々、艦娘の中でもとりわけ霊的な度合いの強い正規空母のあいだでは、かなり儀礼的な意味でこういうことをやっていました。とはいえ顕現から時間が経ち、みなさん性的な面でも人間味が増してきたのです。駆逐の子たちみたく、純粋に楽しんでもいい頃合いでしょう。

性器

「い、いいの？」「ず、瑞鶴先輩や鳳翔さんになら、私平気です……から」言い終わるや、横たわって大またを広げる葛城が、自分の大事なところを思いきり、両手で広げた。秋雲が貸してくれたエロ漫画みたいに（ちょっと興味があっただけよ！）本当、くぱぁって感じ。「うわ……」赤い。そりゃ粘膜だから当たり前だけど、火照って、濡れててらてら光ってる。向かって左のびらびらのほうが大きくて、色も違う。お……の穴はあたしの人差し指も入らなさそう。「瑞鶴先輩……すごい、興奮してて可愛い」う、うるさいやい。

放尿

「いいのよ、葛城さん」しゃがませた葛城さんを支え、ゆっくりと撫でさすります。「他の子とおしっこしたことあるでしょう？」「ド、ドックで、ばかわかぜがいきなりその場でするから、つい、つられて……あ、瑞鶴先輩、出ます……」しゅうううう、と勢いよく尿を迸らせる葛城さん。「うわ……うわ……葛城のおしっこだ……」葛城さんのあそこと同じくらい紅潮した瑞鶴さん、ほとんどまっすぐな放物線に目が釘付けです。実のところ奥手で、川内さんと中学生みたいなおつきあいしかしてないのが心配だと、翔鶴さんや加賀さんから相談されていたのですが、うぅん、刺激が強すぎたかしら……。

自慰

「先輩、せんぱいっ」葛城が、剥き出じにしたクリを指で挟んで、激しく擦り上げてる。あたしの名を呼びながら、エロ漫画で読んだ、男の子のオナニーみたいに。すごくエッチで、切なくて……昭和十九年前半の瑞鶴は出ずっぱりで、進水後の葛城とのかかわりは薄かった。葛城が竣工した翌朝、あたしは呉を出て、二度と戻らなかったのだ。あんまり慌しくて、何か残してあげられた自信はあんまりないけど……今、こうして慕ってくれる彼女に見合う、“瑞鶴先輩”でありたい。そう思ってる。あと、たぶん今晩オカズにする。

下着姿

「か、かわいい下着ね時雨ちゃん」「え、ええと、天城さんも似合ってるよ、うん」突然、下着姿のお姉さんに囲まれるという経験をしたことがあるだろうか。僕はある。というか、現在進行形で経験中。ぬっと現れた雲龍さんに有無を言わさず第一空母寮に連れ込まれて、剥かれて、これ。な……何かな。

「時雨、私のは可愛いかしら」「……可愛いというか、その、すごいよね」「すごい？」胸元に視線を落とす雲龍さん。そこには僕の顔くらいある、扶桑や山城よりも全然大きなお胸と、それを支える細い布地が。……はじめて一緒に入渠したときびっくりして、思わず五月雨の目を隠したりしたけど、雲龍さんは顕現したときからこの下着で、特に不便もないのでそのまま使ってるって。駆逐艦にはちょっと刺激が強いんじゃないかと思うけど、雲龍さんはマイペースな人だし、それに、僕が彼女に何か意見するなんて……。

胸部装甲・陰部

突然、裸のお姉さんに囲まれる経験……もう、いいや。目の前に、どたぷん、としか形容できないスゴいモノが迫ってくる。というか、押しつけられた。「むぷっ」「どう？」どうもこうも……。「あなた、こういうのが好きだって扶桑に聞いたわ。第一艦隊にいたから？」……〝昔〟戦艦の護衛やってたからって、いま大型艦の大きなおっぱいに弱いなんて道理ないよ、と叫びたいのはやまやまだけど、僕の手と頬は正直だ。まさしく空母の……。

天城さんのお胸は、改鈴谷型の機関を転用したこともあって、鈴谷さんと同じくらいの大きさ。天城さんを見ると、呉で進水したきり放置されていた伊吹を思いだすって鈴谷さんも言っていたっけ。……雲龍さんたちのような〝若い〟艦娘のことを、早くに沈んだ人たちに紹介するのは、僕や雪風のように遅くまで生き延びた艦娘の役目。僕は……二人を……。「時雨」「ひっ」「私の陰毛をどう思う？」雲龍さんの唐突な諮問。「……白っぽくて、不思議な、色合いだけど……その、ぱんつから少し見えてた」「そう。では、手入れをしてほしいわ。あなたに」「……」「あの、天城も、お願いできませんか」ぼすけて。

性器・放尿

「さ、さあ、よく見えてやりやすいでしょう」明らかに棒読みなんだけど、僕の目も意識も天城さんの……に釘付けで。クリトリスの皮が厚いな、とか色が薄め、とか、そうだ剃らないと。と思ったところで、手が動かない。だって、うっかり傷つけたら、僕のせいで、空母、失敗、「あの……ごめんなさい、おしっこ、我慢して」「ぇっ」「時雨、早くしないと天城がおもらしをしてしまうわ」「そ、そんな」安全剃刀を持つ手が震える。焦点が合わない。「これじゃ、あ……出ちゃう……」ちょろ。ちょろろろろ。しょわわ……はっきり見える尿道口からにじみ出たおしっこが、勢いのない放物線を描いて、僕にかかった。「あ……あ……」「ご、ごめんね時雨ちゃん。大丈夫、怒ってないからね」

「間に合わなかったわね。仕方のないこと。さあ、時雨、お願い」「だ、ダメだよ、僕は」歯の根が合わないほど震えている。「まず、触ってかたちをよく確かめて」「……」上のほうだけ雲龍さんが自分で広げて、下のほうを、僕の、指で。失敗しちゃいけない、失敗したら、僕のせいで、僕が、僕の目の前で、雲龍さん、「あ……時雨、そんなにされたら……気持ちよくなってしまって」頬に赤みが差した彼女は「私も……漏らしてしまうわ」

しゅぅぅ。天城さんよりも勢いよく、尿が噴きだす。びちびちと、僕の顔を汚す。また、うまくいかなかった。また、うんりゅうさんが、「……時雨」「ごめんなさい」「時雨」「ごめん……なさい……任務……」「でも、気持ちよかったわ」ちょろちょろと、おしっこの残りを出しながら、雲龍さんが微笑む。「気持ちよくしてくれてありがとう、時雨」「――っ」「あのときも、護衛についてくれて、ありがとう」「あ……!!」僕の、なかで、何かが、音を立てて、はじけた。「う、雲龍……さん……潜水艦から……守れなくて……ごめん……なさい……」「言ったでしょう。ありがとう」「あ……あああああああぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

姉妹、語る

大人びた雰囲気だけど、この子もほんの[redacted]なんだ。ということに、雲龍姉さまに取りすがって、わあわあ声を上げて泣く時雨ちゃんを見て、改めて気づきました。彼女の抱えていた傷の深さにも。……搭載機もない、名ばかりの一航戦に所属していた航空母艦雲龍が駆逐艦時雨らに護衛され、特攻兵器桜花をフィリピンへ輸送しようとしたのは昭和十九年十二月のことでした。雲龍は出航の二日後に東シナ海で潜水艦に狙われ轟沈。護衛を果たし得なかった時雨は年末、龍鳳の桜花輸送護衛に投入され、そのまま戻らなかったのです。一航戦旗艦だった私は輸送任務にも用いられず、見ていることしかできませんでした。

時雨が私たちを避けていることに、彼女が最後に同行した龍鳳が軽空母娘になって、ようやく気づいたわ。部署や作戦海域の都合で、艦娘の彼女とはあまり接する機会がなかったから。……護衛の失敗は、一緒に戦い、ひとり生還したのとはわけが違う。私には申し訳なく、天城にも顔向けできないと思っていたのでしょう。私のために戦ってくれたことに感謝こそすれ、恨む筋合いなんてない……ということを、さんざん泣いて、しゃくりあげながら私のお乳を吸うこの子に、もっと早く伝えてあげたかった。天城が泣きながら撫でさする可愛いおまたから、ちょろちょろとおしっこが出ている。心の裡にわだかまる何もかもが、流れ出てしまえばいい。私のお乳から、いっさいの幸福が流れ込んでしまえばいい。何も出やしないけど、もう十分すぎるほどに扶桑や山城や姉妹艦、おおぜいの艦娘たちから愛されていると思うけど、私たちだって、そこに加わってもいいでしょう？

翔鶴型二番艦 瑞鶴

下着姿

「あああ瑞鶴先輩、やっぱり素敵な身体……♥」葛城さんが目を爛々と輝かせています。「改二になったらすっかりムキムキになっちゃったよね」「ちょっ、ヘンな触り方しないでよ！」瑞鳳さんにお腹を撫でられ、真っ赤になって抗議する瑞鶴。ややあって、「ど……どうかな、翔鶴姉」「ええ、とても綺麗よ」私はゆったりと微笑んだ――つもりですが、内心、今すぐにでも腹筋を舐めまわしたいくらいにはアレです。川内さんと仲良くなって微妙に色気の出てきた下着とか、なんかもう尊い。ええ、すみません、瑞鶴に関しては翔鶴、わりと全壊です……。

胸部装甲・陰部

「どうしてづほまで脱ぐの!?」「えへ、お約束かなって……お毛毛がだいぶ育ったね」「きゃあ！」「おっぱいは相変わらず甲板胸だけど。私も改二になったら、毛生えたり、背伸びたりするのかな？　それとも瑞鶴、このままのほうがいい？」「あ、あたしロリコンじゃないし……」親友のような、姉妹のような瑞鶴と瑞鳳。……私の知り得ない戦歴を紡いだ、元一航戦たち。

性器

「や、やっぱりやだ、恥ずかしい」「観念してください先輩」ぎょっとするほど色っぽい眼差しの葛城さんが、瑞鶴の耳元で囁きます。「私のだって見たでしょ」言い終わらないうちに、瑞鳳さんと二人で左右から、くぱ……と。「やあ……」「クリすごい膨れてる。瑞鶴興奮してんでしょ。翔鶴さんにおまんこ見られて」「うう」「綺麗……」鼻息が荒くなるのを自覚します。膣口のまわりに指を這わせ、ぬと……と愛液を掬い上げ。「瑞鶴の女の子のところが、改二になっても綺麗で、いやらしいままで」私は嬉しいのよ」わざと低い声で告げると、「んふ」ひくと瑞鶴の目が一瞬遠くなり、ひく、前と後ろの小さな穴が収縮。気を遣ったようです。可愛い……。

放尿

「さー瑞鶴ちゃん、翔鶴お姉ちゃんにちっち見せてあげましょうね」「づほ怖いよ!?」一段高いところに座らされた瑞鶴、両側から再び大またを広げられました。「翔鶴姉、かかっちゃうよ……」「いいのよ。私におしっこするところを見せて頂戴。あなたのおしっこならいくら被弾しても平気」「……!!」何かがこみあげたような表情で、涙をひと筋流し—瑞鶴は開き気味のおまたから、じょろろ……と放尿を始めました。「はあぁあ♥ 瑞鶴がおしっこしーしーしてる♥」「先輩、可愛い……可愛い……」もはや全壊気味の瑞鳳さんと葛城さんですが、薄く色づいた放物線を遮って両手でばしゃばしゃと受け止める私は、とっくにどうかしているのでしょう。「瑞鶴、温かいわ……」上目遣いに視線を合わせながら、ずぞ、と、手のひらに溜まった尿を下品に啜ってみました。「あ、あ……」息も絶え絶えな瑞鶴。……私は、妹を、支配したいのでしょうか。

自慰

瑞鶴はよく自慰をする子です。私がオカズにされることも知っています(最近は川内さんも)。そのことは嬉しいくらいですが、この季節のこのときは敢えて、いつものようにしてみせて、と嗜虐的に振舞います。私の手を使って、と。そして、私は即席の性具になり、妹の陰核や陰唇、膣を責めたてるのです。動かすのは彼女自身なので、これはあくまでエッチな瑞鶴の自慰。「ぁいく、い……っく」じょぱ、じょろろ、と潮か尿かもわからないものを噴きだして果てる妹。次は……私の番ね。

翔鶴型一番艦 翔鶴

下着姿

「あの」「綺麗です翔鶴さん、すっかり逞しくなって」「あ、秋月さん……」「でも、筋肉ついたけどすごく柔らかくてしなやかで、女らしい、です。たぶん」「朧さんまで」「イヤイヤ、見どころはドスケベな下着でしょうぞ。ホラ、瑞鶴さんが涎たらしてる」「えっ、あっヤだ！」「も、もう漣さん！瑞鶴、なんだか……にぎやかじゃない？」ええまったく。あたしたちの相部屋には馴染みの駆逐の子たちがゾロゾロと。秋雲なんか映画監督みたいな帽子かぶってカメラ回してるし。どうしてこうなった。……まあ、江風があんなこと言ってた以上、すっかり話が出回ってるんでしょうね……。

胸部装甲！陰部

優しい翔鶴姉は駆逐の子たちにも、とても好かれている。大型艦が作戦行動するには、〝昔〟も今も駆逐艦の護衛が必要なのだ。その結果、悲しい歴史を紡ぐことになった関係も「あ！あの、おっぱい触ってもいいですか？」「ど、どうぞ」「すごい……重くてふかふか……」「お、朧ぉ……少し空気読んでよぅ。……正直、改二になった翔鶴姉のエロさにはびっくりして、その晩ひとりで捗ってしまった。川内に複雑な顔されたけど、あんただって神通で……したこと、あたし知ってんだからね。」「下のお毛毛、白っぽいんですね。キラキラして綺麗」至極真面目に論評する漣。「まあすごい濃くて、すごいエロいんですけど」ホントにね……あぁムラムラする。

性器

「自分で広げて、見せて」お返しだとばかりに、わざと硬く冷たい声で命令。ぞっとするほど扇情的な眼差しをあたしに向けながら、翔鶴姉が……お……を親指で開いた。下のほう、膣の穴がよく見えるように。どろり、と白いのがお尻に垂れる。あたしのパンツももうひどいことになってるだろう。「翔……鶴……さん」後ろで朧の喘ぎ声と、きっと秋月だろう、口をふさぐようなくぐもった声。「いやらしいところを駆逐の子に見せて、オカズにされてる感想はどう？」ほとんど見えない小さなクリや、向かって右側だけ少し大きな、けど色が薄くて綺麗なびらびらをいじると、翔鶴姉大きく喘いで、「ごめん……なさい」「……っ」

若鶴たち

秋月が見てきた限り、瑞鶴さんも、この時期はひどく情緒不安定になります。今のことを取り違えることさえ。……二番艦の瑞鶴に比べ、翔鶴は艦載機の攻撃でたびたび大きな被害を受けたのは事実。ですが、それだけ会敵の機会が多かった証でもあります。正面から敵と対決しつづけた被害担当艦と、難を逃れつづけた幸運艦。軍艦としてどちらが恵まれていたのでしょう？……秋月にそれを論ずる資格は無さそうです。秋月にわかることは、いま、お二人のあいだにわだかまりはあっても、それを超える固く強い絆で結ばれていることだけ。泣いて、許しを請いながら攻める瑞鶴さんと、快感に身を灼かれながら妹を赦し、受け入れる瑞鶴さん。きっと、幸せなんです。

放尿

急に、翔鶴姉に怒りがこみあげた。うんといじめたい。「おしっこ。そこに。服着て、ぱんつ下ろして、駆逐の子みたいに」「……」しばらくして、「もう出るわ……」じょろ、ちゅういいい……じょぼじょぼ……大きな、品のない音を立てながら、翔鶴姉が……放尿をしている。「いっぱい……出てる……」漣が自分の胸を揉みながら、かすれ声で呟く。我慢していたのかも、色の濃い、匂いのきついおしっこが床に広がり、泡を立てている。綺麗な翔鶴姉が、こんなのを排泄して、翔鶴姉ばっかりこんな、翔鶴姉は、……違う。違う！……本当に強いのは、強かったのは、翔鶴姉なんだ……あたしなんか……！

航空母艦 大鳳

下着姿

……どうもあたしはづほ……瑞鳳をよく理解していなかったらしい。なんか九九艦爆とか好きな、ちょっと変わった友人だったり姉妹みたいなものだったり、という感じだったんだけど……「にゃああ、大鳳かわいいちっちゃいかわいいちっぱいかわいい♥♥♥　ほらほら瑞鶴見で！乳首が桜色！」「お、おう」……なんというか、ロ……コホン、小柄で細身の女の子が好きだったのね。「かわいいものが好きなだけよ！　だから瑞鶴も好きよ」「あ、ありがと」「もう、何なの!?　私筋トレしたいんだけど」抗議の声を上げる新入り――翔鶴姉といっしょに、あ号作戦で沈んだ装甲空母・大鳳。翔鶴型をも上回る大型空母だった彼女は、何故か駆逐の子並みにちんまりした女の子として顕現したのだった。

胸部装甲・陰部

ろ号作戦で壊滅した母艦航空隊を満足に立て直せないまま、機動部隊に決戦を挑んで惨敗を喫したからか、大鳳は実によく自主トレをする。だから体格に似合わず肉付きがいい。……いいんだけど、裸になれば年相応というか。「見て瑞鶴。かわいい割れ目♥」「あ、あなただってつるぺたじゃない」あたしはロリコンじゃない、ロリコンじゃない……。

性器

「いやぁん」くぷ、とあそこを広げる。ひだひだも全然薄い、幼い、かわいいおまんこ。秋月がここにいたらかぶりついてるんだろうな。「って、づほもかぶりつきじゃないの！」だってかわいくてえっちなんだもん！ホラ、ちっちゃいクリとか！「へ、変態……栄光ある帝国海軍の軍艦が、どうしてこんな」涙目で睨みつける大鳳。……帝国の命運を一身に背負った、第一航空戦隊・第一機動艦隊旗艦としての初陣で沈んだ彼女に、私たちがかけられる言葉なんて思いつかない。提督は、いつも言ってる。艦娘たちには、〝娘〟としての生も存分に謳歌してほしいって。……私は大鳳の、小さな膣口にそっとキスをした。

放尿

さんざん弄って、すっかりとろとろに仕上がった大鳳といっしょにおじっこをした。「見て」しゅーっ……自分でもちょっと可笑しくなるくらい、おまたから勢いよくおしっこが飛ぶ。「……あたしも、見たい」大鳳を後ろから支える瑞鶴が囁く。むっつりさんめ。「う……出る」ちょろ、ちょろろろ……ちょおおお……大また広げたことで中が見えるほど開いた割れ目から、排泄が始まる。「おしっこ大鳳、かわいい……♥」「やだ……燃料……」「大丈夫よ。大丈夫。あんたはおしっこしてるだけ。爆発も沈没もしない」恥丘を優しくさする瑞鶴。「……ごめんね。なんて声かけていいかずっとわかんなかった。こうしておしっこしてるあんたは、あたしたちと同じ普通の艦娘なんだ。……瑞鶴、大鳳と、友達に、なりたい」「……わた、しも」

蒼龍型航空母艦 下着姿

蒼龍

「ふっふっふ蒼龍先生、ここ一年でまたまたおっぱいが育ったかしらね？」「あぁん、やだやだ！」身をよじらせていやいやをする我がいとしの相棒。そのたびにぷるん、ぷるんと、ブラからはみだしかけてるでっかいものが揺れやがりますよ。「ていうか、ちょっと食べすぎなんじゃない？　だいぶむっちりしてるわよ最近」「う、うっ……伊良湖ちゃんが最近腕を上げたから」弓使いの正規空母らしく鍛え上げた腹筋がまるで目立たないくらい、ふよふよと指の沈むお腹を隠す蒼龍。いちいち可愛いなあもう！

飛龍型航空母艦

飛龍

「飛龍はいいなぁ、食べたぶんが筋肉に回るから」可愛いチェック柄の下着に似合わずばきばきに割れた腹筋を撫でる。「努力してるの！　体質のせいにしないでもうちょっと運動しなさい」「うぇー」頬を膨らませた私を見て、くすりと笑う相方。……海の底から甦って、また戦ってる、私たち一航艦二航戦の、今日は特別な――えっちの日。

胸部装甲・陰部

飛龍はよく私の胸をネタにしてくるけれど、美脚だなんだと評判の飛龍だってけっこうなおっぱいの持ち主だ。だいたい私たちより赤城さんや加賀さん、雲龍なんかのほうが全然大きいし。「でも私のは、蒼龍のほど柔らかくないのよね」むにゅう、と乳を押しつけてくる飛龍。「ホラ潰れかたが全然違うし」「むぅ、釈然としないなぁ」しばらく経っても、飛龍は離れようとしない。そしておでこもくっつけてくる。「飛龍？」「このまま、蒼龍を感じさせて」かすれ声。あ、そろそろだ。「ごめん」「いいよ……飛龍。私も……一緒に……っ」「う、うぅ」「ぐす……うえぇぇ……」「うあぁぁ……」

私たちは、この〝特別なえっち〟の前に、一年分思いっきり泣くと決めている。泣くのはこのときだけ。あとは三百六十四日楽しく過ごして、さんざん泣いたら今度は全力で、気持ちいいセックスをしたいから。私のわがままで、あまり手入れをせず生やしっぱなしにしてもらっている蒼龍の下の毛の感触を、存分に味わいたいから。昏い思いのいっさいを、その前にこうして洗い流してしまうのだ。ある意味、禊の儀式なのかも。「あぁ、あー」「うぇえぇ」互いにもたれ、体温を感じあいながら、私たちは泣き続ける。

性器・放尿

「ぐすっ、ほら飛龍、蒼龍のおまんこだよぉ♥」さんざん泣いて、ぐしょぐしょな顔のまま、もっとぐしょぐしょなところがあらわに。濃いお毛毛が、おまんこをぐるりと囲んでお尻の穴のほうまで続いてるのがたまらなくえっちだ。「ん。一年、がんばったね。エライエライ」「どこ褒めてんのよぉ」大きめのクリや、ぷるぷるのビラビラを撫でていると、蕩けきった抗議が上がった。「ね。おしっこ飲んで」「ん。出して」いつもの流れ。蒼龍自身と私の指でぐっと左右に広げたおまんこから、じゅわっと吹きだした濃い尿を口で受け止める。苦いことこの上ないけど、飲みくだす。喉が、お腹がかっと熱くなる――燃えさかる蒼龍の零戦と艦攻を受け入れたあの日を思い出す。

飛龍のおまんこは全体的に肉厚で、下のほうまでびらびらが発達してて色も濃い。そして、毛は私よりも薄いけど、少し匂いが強め。私は鼻を近づけ、思いきり嗅いだ。「やぁ……変態♥」「おしっこ飲む子に言われたくないですー」舌先で、膣穴や尿道口を犯すようにつつき回すと、「ん……私も……おしっこ出すよ」「いいよ……♥」私は少し顔を離した。そこへ、じょろろ、と黄色いのが。思いきり舌を出して口を開け、飛龍に見せつけるように飲む。「はぁ♥　はぁぁ♥」ほぼイキかけてる飛龍。この子と一緒に幸せになるために、私はなんだってする。

交尾

存分に高めあったあとで、一気に突き崩すのは、丹念に組み上げたドミノに蹴りを入れるような、暴力的な爽快感がある。言葉なんて、要るもんか。攻めたて、ねぶり、ほじり、噛みつき、くっつけ、すり、飲み干し、出したり噴いたり垂れ流したり、そうして何もかもいっしょくたのぐっちゃぐちゃになって、二匹の龍は吼え、天空の果てまで駆けのぼる。私たちは甦る二度死ぬ。死んで終わって、またすっかり消耗戦、と化した深海棲艦との戦いつまで続くのか見当もつかないけれど、願わくばこの愛する多いが聞こえ、どうかこのいけな小娘三人を見守りたまえ。

航空母艦 加賀

下着姿

こんなところにいたんですか加賀さん。もう、今日は大事な日なのに。「ごめんなさい、赤城さん。少し、整備に時間がかかってしまったわ」ふふ、仕方のない人。戦艦からの改装に手間取ったのは知っていますけど、こんなときに遅れをとるのはめっ！　ですよ。さて。……うん、よい仕上がりですね。総身に気力がみなぎっているのがわかります。百年兵を養うはなんとやら、張り切って……あの、お胸、きつくないですか？　出撃ですか？「ええ、下令されたわ。赤城さん、点検してもらえないでしょうか」

胸部装甲・陰部

大きなタンク……たいへんな改装だったわね。私も早くあなたのような全通甲板がほしいです。どうも三段もあると使い勝手が……でもこんなに大きいと傾斜復元がたいへんそう、だから座礁するんですよ。インド洋作戦は残念でした。加賀さんにも見せてあげたかったわ、蒼龍の艦爆隊がすごいんですよ、急降下……直上……「赤城さん」あ、加賀さん、やはり可燃物はなるべく減らしたほうがいいと思うの。お毛毛、綺麗で素敵だけれど、剃ってしまいませんか？「いえ、私は」……私の言うことが聞けないの？　いけない人ね。そこへお座りなさい。「はい」

性器

広げなさい。「……」いやらしいかたち……加賀さん、ここは何というの？「わ、私の、性器、です。おまんこ……とも言います」あの、とても湿っているけれど、防水は大丈夫なの？　パラオで座礁したと聞いて心配したのよ。まだまだ始まったばかりなのだから、気を引き締めていかないと。「申し訳ありません……」ああ、どんどん溢れてくる！　排水を、排水を急がないと！

放尿

さあ、ここへ出してくださいな。もうあまり時間がありません。どうしたんです？敵は東京を襲ったのですよ。「す……すみません……興奮……してしまって」栄えある第一航空戦隊がそんなことでどうするのです。五航戦に示しがつきませんよ。「あ……出、ます」ああ……素敵……加賀さんのおしっこがたくさん……「んはン」ここの小さな穴から出るのね。匂いすごい……黄色くて、しゃーって……まだ出るの？「も、もう終わります……から」あ……止まりましたね。あら、周りにたくさん垂れて……綺麗にしてあげます。「あ、あぁあっ、やっあっああっ」

自慰

「あ、あか、ぎ……さん」我慢できないというから何かと思えば……私の艦載機、気持ちよいのですか？「い、いい……」すごい、真っ赤に充血したところから、白いのがとろとろ……ねえ、機動部隊は本当にいるのかしら？　連合艦隊は何も言ってこないわ。でも大丈夫よね。私たちなら。加賀さんがいるもの。私の素敵なひと「あ、イッ……ぅ……ぅぅぅっ」ひゃっ!?　顔にしぶき、何、艦爆!?　どうして、私……？「……赤城さん。……大丈夫。今から正気に戻してあげるわ」

航空母艦 赤城

下着姿

「赤城さん。改装しないといけないわ」「加賀さん、でも南洋部隊に呼ばれているの」少し青ざめた、焦点の定まらない目の赤城さんを容易く脱がしていく。女性らしい厚みのある脂肪と、日々の鍛錬で鍛えた強靭な筋肉が絶妙なバランスで同居した美しい身体が露になる。「ラバウルを陥とさないと」「こんな下着でいくさ場へ赴こうというの？」敢えて低い声を出すと、海の底のような真っ黒い瞳に怯えが走った。「ごめん……なさい、あんなところにイギリスの爆撃隊がいたなんて」「……」要領を得ない言葉が続く。今年はことさら、記憶の混乱が激しい。

胸部装甲・陰部

「か、加賀さん、あんまり見ないで……」いやいやをすると、ひと抱えほどもあるお乳がぶるん、と揺れた。私よりも柔らかい、と五航戦の妹に煽られることも。……赤城さんと私、これほどの体躯なのは、戦艦として生まれついたことの証らしい。とても数奇な運命の果てに、私たちは僚艦となり、短いあいだ、濃密な経験を積んだ。同時に少しずつの蹉跌も。それが澱のように重なっていき、やがて底が抜け、……こうして人のかたちを得たあとも、理性を保てなくなるほどの重い重いくびきとなってしまった。雨の季節、私たちの心はともすれば、深海を彷徨いつづける。……私が手をとって救いあげねばならない。そして少し伸びた赤城さんの下の毛をこの手で処理しないと。

性器

見るからに柔らかそうな性器が、赤城さんの震える指で広げられた。「どうしてきちんと剃らないの」生娘のように細く、あまり縮れてもいない生えかけの陰毛を撫ぜる。「ご、ごめんなさい……姉さん」ずきり、と心が痛む。赤城さんが〝昔〟、ついにまみえることのなかった姉――天城型巡洋戦艦改め航空母艦一番艦・天城。震災で回復不能な損傷を受け、建造が放棄された彼女の代わりに空母となったのが、加賀型戦艦一番艦となって華々しく進水したものの、ワシントン条約締結に伴って廃艦となるはずだった私。艦娘として改めて以来、赤城さんと一航戦を編制して、彼女のパートナーであり、かつ、姉にもなれればという意識はある。……条約どおり処分された〝妹〟土佐の代わり、でもあるのかも。

六月五日

「今回は……私だけだったのね」「大丈夫です。赤城さんの言ったとおりに措置しました」「ごめん、なさい、加賀さん」「心配要りません。私が少し困っただけ。他の誰も傷つきませんでしたし、窓ガラスひとつ割れていません」「……う、うぅ」「大丈夫よ……大丈夫……」「うぁ……あぁあああああ」「大丈夫……、私が……、守る……からぁぁ……」――こんなふうに、私たちの戦没日は過ぎていくのです。

放尿

「悪い赤城さんにはおしおきです」「い、嫌ぁ」元戦艦の意地とばかりに赤城さんのお尻を抱え上げ、促した。「出して」「出、出ません」「早く出さないと、格納庫の中で誘爆が広がるわよ」耳元で囁いた。びくっ！　と竦みあがった赤城さんの目から光が消える。「な、何を」「敵機直上。急降下」「嫌……嫌ぁぁ!!」じょろ……じょろろ……じょおぉぉ……半ば失禁するように、赤城さんが震えながら排尿する。私の尿と混ざりあう。おしっこが終わるのを待って、私は容器を抱え、中身を口に含んだ。そのまま、呆然としている赤城さんに口移し。「……か、が、さん」弱弱しい声が漏れる。目に光がある。

Der Flugzeugträger der Graf Zeppelin-Klasse #1

Graf Zeppelin

下着姿

「むぅ……この艦隊に来ていろいろと刺激的な体験をしているが、アカギ、これは、いったい……」「裸のお付き合い、というものですよッ……ツッペリンさん」「ツェッペリンだ！」ごちゃごちゃとうるさい下着姿のドイツ空母。赤城さんに名前を呼ばれるだけで光栄と思いなさい。てっぺんだかなんだか知らないけれど、そんな発音しにくい名前が悪いのだわ。「加賀さん、めっ。他人の名前を悪く言うものではありません。テッペリンさんに謝りなさい」赤城さんに免じて謝ってあげます。ふん。「ごめんなさいねツエペリンさん、加賀さんも悪い子じゃないんです」「……Sehr schade!」

胸部装甲・陰部

「あ、あんまり見ないでもらいたい……Ich beschäme mich」雪のように白い頬を紅潮させる、全裸のドイツ娘。こうした交流はむしろ日本よりも盛んだと聞くのだけれど。「まあ、加賀さん見て。やっぱり下は剃ってしまうのね。ツペリンさん、綺麗よ♥」「赤城がなんだかいやらしいぞ、加賀！」少し落ち着きなさい。はしたない。普段おとなしいわりに、五航戦妹並ね。（完成しなかったからかしら）とは、口が裂けても言えないけれど。

性器

「あ、アカギ!? 本当にこれは必要なのかっ!?」「慎みなさいドイツ。赤城さんにそうしてもらえるだけで光「間違えてもいいからせめて名前呼んでくれ！」もう、ふたりとも静かになさい。それにしても、やっぱり西洋の空母の大切なところはピンク色で綺麗です。私も加賀さんも、ここはどうしても黒ずんでしまうから、羨ましいわ。はぁ、可愛い……「Au…あ、アカギ、舐め」おつゆが溢れてくるわ……気持ちいい、ですか？「O.o…so angenehm……」あぁ……匂いで感じてしまうわ……テペリンさん、これは〝艦〟であり〝娘〟でもある存在として、二度目の生を受けたからこそ、感じられる素敵なものなんですよ。「わ、わたしは」〝昔〟を取り戻すように勇敢に戦うのもいいでしょう。でも、どうか、忘れないで。私たちは、こういう悦びに身を浸すことも許されるのです。

放尿

「Ach, au……!!」大きく喘いだゼペリンさんの腰が浮いて、がくがくと震えました。気を遣るのは三度目。加賀さんによると、私はその、上手いらしく、手も足も出ないほどとろとろに蕩けさせられてしまうのだそうです。私はただ、気持ちよくなってほしいと尽くしているだけなのですが……。「あ……ich ich mache Pipi……」息も絶え絶えに零れた異国の言葉。なんとなく意味はわかりました。「いいのよ」鼻の頭に唇を落とすと、すっかり濡れそぼった女の子の場所から、じょろろろ……と可愛いおもらし。「熱い……」左手で受け止める加賀さん、すっかりのぼせあがってしまっています。「赤城さん、」目の前に差し出された加賀さんの手のひらに溜まった、ゼップさんのおしっこをすすりました。あぁ、たまらない……。喉を鳴らし、もうひとくち、今度は眼下の、〝昔〟沈んだ私の代艦にされかけたドイツ少女に、口移しで。……いつしか私たちは、なんだかよくわからない涙を流していました。人間には理解しがたいかもしれませんが、いつ終わるとも知れない戦いの合間に、艦娘にこういう幸せがあっても、いいですよね？

おしっこれくしょん　空母編　下
Combined Fleet Girls Collection FAN BOOK Vol.16

発行日　2016年07月03日

発行サークル　LUNATIC PROPHET
web http://circle.lunaticprophet.org/
pixiv id=92903

発行人　有村悠　Yuu Arimura
e-mail edgeoftheseason@gmail.com
twitter id=@y_arim

印刷所　株式会社サングループ
web http://www.sungroup.co.jp/

produced by Lunatic Prophet
2016.06.26.

ヤりました。